

JASE

# 現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2024年  
No. 158  
2024年5月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会  
THE JAPANESE  
ASSOCIATION  
FOR SEX EDUCATION

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3富山房ビル5階 Tel.03-5801-6788 Mail info\_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美  
© JASE. 2024 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

西尾市教育委員会主催 家庭教育特別講演会・報告 … 1	多様な性のゆくえ <sup>⑧</sup> …… 12
特別寄稿・感染症対策の1つがワクチン …… 7	出会いは世界を広げていく <sup>⑭</sup> …… 13
"めぐみ"を生きる <sup>②</sup> …… 10	今月のブックガイド …… 14
わたしたちの性教育アクション <sup>⑭</sup> …… 11	JASEインフォメーション …… 15

## ●西尾市教育委員会主催 家庭教育特別講演会・報告

# 大人と子どものハートフルな「生」の会話

## “いのちのはじまり”のこと “心とからだ”のこと

小貫大輔・東海大学国際学部教授を代表として、2023年度より、教員向けに性教育研修を推進する事業「性と文化」プロジェクトが進められている。2024年3月23日(土)、西尾市教育委員会主催(「性と文化」プロジェクト・共催、日本性教育協会・協賛)による家庭教育特別講演会が開かれた。



西尾市生涯学習課  
公式 YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=A5DQPcUr4R0>

### はじめに

西尾市子育て・多世代交流プラザにて開催された家庭教育特別講演会は、『大人と子どものハートフルな「生」の会話～“いのちのはじまり”のこと・“心とからだ”のこと』をテーマに行われた。

「ハート偏に生」と書く「性」について、家庭や学校でどんなふうに話をしたらいいのか、大人と子どもがハートフルに話せるためのヒントを、小貫大輔氏(東海大学国際学部教授)、渥美治世氏(東海大学医学部助教・産婦人科専門医)、荒井英恵氏(府中の森土屋産婦人科助産師・アドバンス助産師)、齊藤奈月氏(東海大学大学院生)の4人の登壇者がそれぞれの立場から講じた。教育委員会が主催ということで、託児のサービスもあり、教員や保育士のほか、夫婦や親子で来場する参加者もみられた。

愛知県西尾市は、トヨタなどの工場があり、ブラジルやベトナム、フィリピン国籍を持つ市民も多い。宗教や文化が異なる家庭が一つの社会を作ること考えたとき、性教育という立場から「共生」について考えることができるのではないかと、東海大学教授の小貫氏は考えた。性教育は命の話であり、親子関係ややさしい社会作りへと繋がる話でもある。この考えに賛同した西尾市教育委員会の生涯学習課は、学校関係者を含む全市民を対象に、家庭教育特別講演会として開催することを決定した。

### 講演1：小貫大輔氏(東海大学国際学部教授) クイズとワークショップで考える 「ジェンダーとセクシュアリティ」

東海大学国際学部で「ジェンダーとセクシュアリティ」、「人間学」などの授業を担当する小貫氏は、導入として参加者へクイズを出題した。画面に映ったのは、トイレのマークの赤と青の色を逆さまに入れ替えた



もの。「どちらが女性用で、どちらが男性用のトイレだと思いますか？」と尋ねる。赤を女性の色ととらえる参加者が多い中、「男女の体型

の違いを強調した三角形・逆三角形と違って、色のイメージは文化や時代によっても異なりうる。性をめぐる規範はときにたいへん恣意的」と小貫氏。文化的・社会的に構築された性差の概念を「ジェンダー」といい、トイレマークの例のように、私たちは無意識のうちに強く影響を受けている。文化・社会的なジェンダーの意識はパワフルで、それが「不平等」をもたらすとき、理不尽な力で人々の幸せと世界の発展の足を引っ張ることを指摘した。

教育現場でも、伝統的なジェンダー観にとらわれない人間の多様な生き方が前提とされるようになってきた。それに伴い、「性の多様性」についても教科書に載せていこうという流れが起きている。小学校の教科書では昨年から、中学校では今年から、性的マイノリティを取り上げるところが出てきた。「生まれたときの体の性と、いま自分が思っている性が違うこともあります。また、好きになる相手が異性の場合もあれば、同性の場合もあるのです」と話す。

### 親から子へ、性について話すときの秘訣

小貫氏の講演は、参加型のワークショップ。まずは、異文化理解の一環として、様々な国における挨拶の仕方を参加者同士で体験した。お辞儀、握手、ほっぺたにキスという3つの挨拶である。日本のように目を伏せて、体にも触れることのない挨拶はむしろ世界的にも珍しく、実際に身体が触れ合う挨拶には、人と人の距離を縮める文化的な仕組みがあると小貫氏は言う。

ワークショップでは、以下の問いについてまわりの人と話し合った。それぞれの家庭では「女性の性器のことを何と呼んでいましたか?」、続けて、「子どもに、赤ちゃんがどこから生まれてきたのか聞かれたことはありますか?」、「精子と卵子がどうやって一緒になるか、お子さんに話したことはありますか?」と、日本の家庭では話すのに躊躇するような質問が続く。

このような性的な話題についての子どもの疑問に、



身近な家族が答えてあげられないと、子どもは性のことは聞いてはいけないことだと察知して、結局、インターネットのアダルト動画から情報をえることになりかねない。これは悲劇だと小貫氏。子どもが「性は汚くて、怖くて、いけないこと」と思ってしまう前に、身近な大人が、信頼関係の中で「大切なこと、素敵なこと、神聖なこと」として教えることはできないかと問う。

性について描かれた「絵本」についても話題となった。絵本は、あたたかい気持ちになることを基本として作られたもので、汚いもの、卑猥なものとして性を描写することはないとして、赤ちゃんが生まれてきたときのことについて描いた絵本をいくつか紹介した。

「表現方法にはいろいろあっても、絵本は基本的にみんなハートフルなアプローチになっています。私がこの本がいいよとお勧めするよりも、各家庭でどう教えるのがいいのかと考えて、絵本を選んでいくのが一番いいと考えています」。



性教育の絵本：日本でも諸外国でも「赤ちゃんはどこからきたの」というテーマを扱う絵本が多い

### 講演2：渥美治世氏

(東海大学医学部助教・産婦人科専門医)

### 身体の変化にそなえて、いまできること

2人目の登壇者は、東海大学医学部助教・産婦人科専門医の渥美氏。自分の健康に無頓着な若者たちの意識について触れ、身体作りを今からしていかないと、年を重ねてからでは取り戻せない健康があること、ま



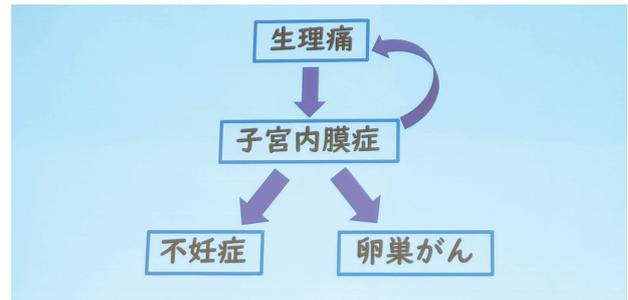
たその健康が次世代に引き継がれてしまうという課題について講演した。将来子どもを産む、産まないにかかわらず、自己実現をするために自身の健康管理を行う「プレコンセプション・ケア」の重要性を強調した。

導入では、物語の『3匹のこぶた』を例に挙げ、健康はその土台作りが大事という話をクイズ形式で問いかけた。たとえば女性は20歳、男性は25歳を超えると骨密度を上げることは難しくなる。年齢を重ねるごとに骨密度は低下するため、若いうちに十分に上げていないと、老人になって足の付け根の骨を折って（大腿骨頸部骨折）歩けなくなってしまう人もいると渥美氏。また歯周病は、自分の糖尿病や心筋梗塞のリスクを上げるだけでなく、妊娠中はお腹の中の赤ちゃんに影響を及ぼし、低出生体重児になることもあるという。

### 生理痛を甘く見てはいけない

渥美氏は、大学病院でホルモン外来を担当し、生理や更年期症状に悩む患者をサポートしている。現在女性のライフサイクルが大きく変化し、初産の平均年齢の上昇と一生のうち子どもを産む数（合計特殊出生率）が低下したことから、昭和のはじめの頃に比べ排卵・生理の回数が10倍も多く、生理にまつわる問題を抱える人が多い。

講演では、不妊外来に来た30代後半の女性が、子宮内膜症の診断で自然妊娠が見込めず体外受精になった症例をあげた。若い頃から生理痛がひどかったが、親に「薬はなるべく飲まないほうがいい」と言われ、痛みを我慢し続けていた。通常の生理痛だと軽視せず、早いタイミングで治療に結びついていたら、もっと自分らしい人生が送れたかもしれないという。また、「市販の痛み止めは、痛みが強くなってから飲んでみさか



ず、痛くなったタイミングで飲むから少量でも効く」という話には、参加者から驚きの声があがった。

子宮内膜症の原因は明らかではないが、生理で身体の外に流れ出る子宮内膜が、何らかの原因でおなかの中に飛び、そこで女性ホルモンの影響を受けて増殖したり、周りの組織を巻き込んで癒着したり、ひどい生理痛や下腹痛を引き起こす。子宮内膜症は卵巣にできると卵巣がんの発症母地になることがある。

### 若い頃から妊娠についての知識の周知を

若者で、これまで定期的にあった生理が停止した場合も注意が必要で、妊娠以外にもダイエットや過度の運動が原因のことも多い。女性ホルモンはコレステロールがベースとなっており、カロリー不足で「このままでは妊娠は危険」と身体が判断して生理をストップさせるという。女性ホルモンが不足することで生理がなくなると骨貯金も止まり、子宮の成長障害や委縮、卵巣機能の低下など、妊娠しにくい体質へとつながる。渥美氏は、3か月以上生理が止まっていたら、早く婦人科への相談をしてほしいと促す。参加者の中には、親と一緒に思春期の女性も参加しており、深くうなずく姿も見受けられた。

また卵子の赤ちゃん（卵母細胞）の数は、妊娠6か月の胎児で最も多く約700万個あるが、新生児は200万個、思春期は30万個と次第に少なくなっていく。35歳の時点では3～5万個と言われており、妊娠率が低下し、流産率が上昇し始める。不妊外来で40歳を越えて卵の数が少なくなっている話をすると愕然とする患者がいる。若い頃から、生物学的に妊娠能力は決まっていることを知り、ライフプランとしての出産のタイミングを考えておくことも必要と話した。

最後に、思春期からはじまる生理について、生理痛は万病のもとであり、早めに治療が必要なこと、若いうちから健康のセルフケアをしっかりとっておくことで、思い描く人生が送れるということについてまとめた。

人生の後半に入ってから後悔をしないよう、いまの自分の心と身体を大切にすることを、大人が伝えていかなければならないと感じられた。

### 講演3：荒井英恵氏（アドバンス助産師）

#### うまれる場にある「ワンダーと絆」



3人目の登壇者は、アドバンス助産師の荒井氏。アドバンス助産師とは、助産師の中でも指導できる最高レベルの資格を持つ、質の高い助産ケア能力を持った助産師のことである。豊富な経験を持ち、数多くの出産を見てきた立場から、命の始まりと絆について話をした。

荒井氏ははじめに「紙の端に鉛筆の先を刺して、小さな穴をあけてください」と参加者に促した。これが受精卵の大きさであると言い、「それが10か月かけて、この大きさに育ちます」と赤ちゃんの人形を見せる。さらにトイレットペーパーの芯を取り出し、「その赤ちゃんがこのぐらい細い産道を通して生まれてきます」と参加者に視覚的に実感させていく。「みなさんがそうやって生まれてきたことは、忘れていたり身体の奥底にしまっていたりするのですが、これは確かにみなさんが通ってきた道なんです」と荒井氏。

#### ワクワクした出産について伝えてほしい

出産の方法について、お産の施設や、無痛分娩や帝王切開といった出産の選択肢を提示した後、出産環境というのは様々な背景（文化・社会・地域など）が絡み合い、セクシュアリティやジェンダーへの配慮も必要であるという考えを述べた。また出産について話をする機会があまりなく、出産の大切さや素晴らしさを子どもが知る機会も少ないとして、お産の体験談をいくつか紹介した。



出産の体験を「ワンダー・オブ・バース」として、産後2日目の当事者の感想を見せていく。出産のときの幸せな気持ちや、胎児と気持ちが通じ合えた瞬間など、当事者でしかわからない特別な思いが綴られたスライドが続く。

「家族にお産の話をするとしたら、このワンダーの気持ちを大事にして話をしてほしい」と荒井氏。「出産を医学的な情報として話すより、このワクワクした気持ち、なんともいえない神秘的な気持ち、そういうものを糸口に話すことで、子どもに何かしらのヒントを与えることができます」と話す。

子どもは、出産の流れを知りたいわけではないため、一度きりで全部伝えようとせず、繰り返し、その子に合わせた言葉で、少しずつ話していけば良い。親がワンダーの気持ちを話してくれたことが、前向きな学びに繋がっていくのではないかと荒井氏は考えている。

最後に、詳細な出産時の記録写真を通して、出産のときの感情の変化や、子どもの立ち合いの様子、夫や助産師の支えなどを解説していった。荒井氏は、身近な大事な人と生まれたときの話をすることで、お産がどういうものか、どうして子宮へ作用するだけでなく、愛おしさも感じるオキシトシンというホルモンが出るのかを考えてほしいという。そして私たちが支えて支えられる中で生まれてくるという実感や、繋がりの中にこそ発揮される力があるという感覚を思い出すきっかけにしてほしいと話した。

### 講演4：齊藤奈月氏（東海大学大学院生）

#### LGBTQ は身近なだれかの物語

最後は、東海大学大学院生でありレズビアンの方である齊藤氏が、体験談をまじえながら、家族や周囲の人たちとどうかかわっていけばいいのか考えることを主題に講演を行った。LGBTQの人の割合

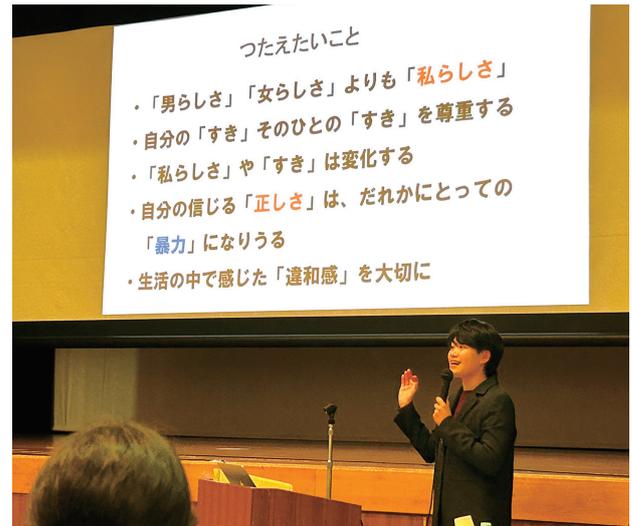
は、左利きの割合とほぼ同じと言われており、自身がカミングアウトした後、同じ立場の人々が予想以上に多く身の回りにいることに気づいたと齊藤氏は言う。LGBTQの当事者が自分の周囲にいないと感じている人々に対しても、他人事ではなく「身近にある誰かの物語として受け取め、聞いていただきたい」と、幼い頃からの体験を語った。

男兄弟に囲まれて育った齊藤氏。兄や弟と同じように、かっこいいものが好きなのに、女の子というだけで母親にワンピースを着せられたり、髪を結ばれたりすることに違和感を覚えていた。第二次性徴期に入り、体の変化に強い嫌悪感を抱くようになった。中学3年の時には、同性に対しての恋愛感情を初めて意識し、自分自身の感情や身体に対する混乱と不安が高まっていった。

当時の保健の教科書では、「思春期に異性を好きになる」と教えられていたため、彼女は自分が「普通」ではないと感じ、自己否定に陥ってしまった。しかし、高校3年生の時に彼女ができ、自分自身をありのまま受け入れてくれた相手に出会うことで、今まで感じたことのない幸福感を得ることができた。その経験は、彼女にとって自己受容への大きな一歩となり、自分自身と向き合う勇気を与えてくれたのだ。

### 大切なのは「歩み寄ること」

今回の講義は、「性的マイノリティに対する受容の難しさ」に焦点を当てている。その中心となるのは、齊藤氏が若き日に経験した深刻な出来事で、特に20歳のときに最も愛する母親から受けた「拒絶」の瞬間である。圧倒的な不安と緊張の中で母に自らがレズビアンであることをカミングアウトした齊藤氏だが、彼女の勇敢な告白は、母親の「気持ち悪い」という冷たい拒絶によって無に帰した。それでも齊藤氏が諦めなかったのは、自分と同じような思いで苦しむ若者を一人でも多く救いたかったからだ。その後、母親にLGBTQの本を薦めるも読んでもらえず、得た知識を自らの言葉で書き記した手紙を通じて、ようやく母との対話をはじめた。「異性愛が当たり前とされる社会で育った母の視点を変えるのは難しい。自分が当事者だから理解してほしいと言うだけではなく、双方が歩み寄ることが大切だと感じた」と齊藤氏は言う。そして最終的に母が「なつの幸せが私の幸せだから」と



言ってくれた瞬間は、今思い出しても涙がこぼれるほど感動的な出来事だったと語った。

齊藤氏は、性的マイノリティであることを他人に打ち明けられるようになったことで変わった心境の変化をリストにまとめて提示した。家族が理解を示してくれるようになり、自分を好きになれた変化が第一にあり、生活で感じた違和感はしまい込まずに大切にしてほしいこと、自分が信じる正しさは、誰かにとつての暴力になり得ることなどを伝えていた。講演には性的マイノリティ当事者の親や、当事者から相談を受ける立場の人々も参加しており、彼らは齊藤氏の話に深く共感し、熱心にメモを取る姿が見られた。このような情報交換は、理解と受け入れのプロセスを促進し、参加者にとつても非常に有意義な時間となった。

### グループワークと質疑応答



講演会の終盤では、参加者が5人前後のグループとなり、感想をシェアした。前半の参加型ワークショップではじめて会う人との壁がなくなっていたせいか、各グループが積極的に話す姿が印象的であった。小貫氏が「時間ですが…」と言っても、なかなか話の

終わらないグループが多かったようだ。

質疑応答では、「子どもが異性が遊ぶおもちゃを持ってきた。どう対応したらいいか」、「同僚の先生で、理解のない人に性的マイノリティの話を理解してもらうにはどうしたらいいか」といった具体的な相談があった。

## ユネスコが提案する包括的性教育

小貫氏は性教育について、いまは過渡期であり、教育者の対応にムラがあると話す。生理の授業があっても、先生が口ごもってちゃんと教えてくれなかったため、実際に生理を迎えたときに「実は何が起きているのかわかっていなかった」という生徒も少なくない。

ユネスコの提案する包括的セクシュアリティ教育(CSE)の8つの指針の中には、今回世界の挨拶を通じて体験した「人間関係」や、赤ちゃんがどうやってできるのかという対話、渥美氏が講演した秘密ごとにしらない生理の話、齊藤氏が講演したジェンダーイメージの見直しなど様々なテーマが盛り込まれている。これをメトロマップとしてオリジナルのポスターにまとめたものを小貫氏が紹介した。性教育は、道徳的なことを押し付けることではない。セックスを否定的にとらえるのではなく、幸せになるための性の話を大人から話してほしいと小貫氏は言う。「自分の幸せを大切

にし始めると、人の幸せも大切になっていく。そうすれば最終的には、街全体がお互いのことをリスペクトする場所になる。メトロマップはその発想から作りました」と。

最後に、5歳児からの「赤ちゃんはどこから生まれてくるの？」の問いに答えるときの例をあげ、素直に答えれば子どもにはストンとくる、と小貫氏。こうした対話ができる雰囲気の家が広がれば、それが当たり前になる。クオリティの良い、素敵ないのちの話ができる世の中になってほしいと話した。

今回の講演会の参加者は90人。事後アンケートでは、「詳しく知りたいと思っていた話が聞けた」、「様々な専門分野の方からのお話を聞き、とても勉強になった」、「当事者の声に勇気づけられた」といった前向きな意見が多かった。また、職場で性について伝える道筋が見えたと話す教員や、実際に子どもに話す方法を教えてもらったという意見も出た。

もっと話を聞きたい、他でも講演してい欲しいとの意見がある一方で、テーマが幅広すぎてどう受け止めていいかわからない、もっと踏み込んだ具体的な対処法を教えてくださいといった意見もあった。今後このような講演を重ねていく中で、多様な意見交換が刺激となり、さらに深めていくべき課題も見えてくると思われる。

(取材・まとめ 日下淳子)

## JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

### 資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧予約】 事前に電話で予約が必要 [tel 03-5801-6788]。貸出業務は行っていません。

【開室日・時間】 月～金曜日 11:00～17:00

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<https://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

### 資料室 利用方法

### 収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、セクソロジー、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、国内学術誌、国際(海外団体資料・海外学術誌)、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集、ダイヤモンド文庫、団体資料・手引き・白書(都道府県資料、大学関連資料、官公庁資料など)ほか。

[https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy\\_N7GNQ\\_WQaeg](https://opac.jp.net/Opac/search.htm?s=NS1JEYq24WsoCGy_N7GNQ_WQaeg)

